

## 自己の身体と中動態

森田 亜紀

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2000年9月30日 受理)

### はじめに

「いつも自分の体をかまっていますね。」「ほどよい運動で体と心、両方のぜい肉を落としましょう。そして、きれいな血液を肌にも送ってあげましょう。」「こり固まった体は、まず温めてほぐしてあげるのが大事」「傷んだ髪は、正しいお手入れでやさしくいたわりましょう」… (傍点筆者)<sup>1)</sup>。

街の書店で売っている女性雑誌の記事に見られた表現である。これらの文章で注目されるのは、「かまう」「いたわる」「…してあげる」といった、他者に対するはたらきかけを表わすのに用いられる動詞や言い回しを、自分の体、あるいは体の一部に対するはたらきかけを表わすのに用いている点である。これらの動詞や言い回しは、「犬をかまう」「老人をいたわる」「君の仕事を手伝ってあげよう」「協力してあげよう」等、本来、自分以外の生き物や人間に向けて使うものである。そういう動詞や言い回しを自分の体に向けて使うということは、自分の体を自分に対して他なるものとみなしている印象を与える。これらの文章は共通して、自分の体を、自分のものではないかのように、自分とは別の存在であるかのように記述する、という特徴をもつといえるだろう。

ここにみられる、疲労回復の対策や髪・肌の手入れのような、自己の身体に対するはたらきかけは、多くの言語で、中動態 (middle voice) の動詞で表わされる。言語学者スーザン・ケマー (Suzanne Kemmer) のことばを借りれば、「身だしなみやボディ・ケア動作 (grooming or body care actions)」の中動<sup>2)</sup>である。このような「身だしなみの中動」は、しばしば、中動態表現の一つの典型として、事典などにも例示される<sup>3)</sup>。これに対し、他者や他の事物に対するはたらきかけは、他動詞の能動態で表わされる。このことは、自己の身体に対するはたらきかけが、他者や他の事物に対するはたらきかけとは、別のこととして意識されてきたことを示すものであろう。雑誌から引用した上記のような表現は、いいかえれば、中動態で表わされるべき事態と他動詞の能動態で表わされるべき事態との区別の混乱、むしろ事態の中動態的特徴が見失われたことを示すものかもしれない。

本論は、自己の身体との関わりを、中動態という文法上の範疇を足掛りにして考察するものである。筆者はこれまで、能動態 (active voice)、受動態 (passive voice) とは区別されるいわば第三の態である中動態を、言語の範疇にとどまらない思考の範疇として<sup>4)</sup>、芸

術体験、およびその基礎となる知覚体験を考察する足掛りとしてきた<sup>5)</sup>。能動-受動、主体-客体の図式に納まらない事態を考える際、中動態という言語範疇の存在は、事態の特徴をポジティブに捉えるのに有効と思われたからである。本論は、自己の身体に対するはたらきかけが、他動詞の能動でもなく、自動詞の能動でもなく、わざわざ中動態の動詞で表わされることの意味を考えていく。それは自己の身体を考えることでもあるが、同時に、中動という範疇、中動態の射程について、さらに考えを深めることでもある。

### 1. 身だしなみ、ボディ・ケアと中動態

アメリカの言語学者スーザン・ケマーは、インド=ヨーロッパ系言語のこれまでの研究において一般に「中動態」という用語が適用されてきたさまざまな事例を出発点とし、それ以外の言語にも対応する表現が独自の形態的指標をもって存在することを見い出して、諸言語にまたがるカテゴリー、言語範疇として、中動態の一般的意味を考察している。

ケマーは、さまざまな言語における中動態の指標をもつ表現を、意味の上から、いくつかのシチュエーション・タイプ (situation types) に分類する。〔体を洗う〕〔ひげを剃る〕〔自分の髪を切る〕〔服を着る〕といった「身だしなみ、ボディ・ケアの動作」は、「姿勢を変える動作 (change in body posture actions)」、〔移動のない運動の動作 (nontranslational motion actions)〕、〔移動のある運動の動作 (translational motion actions)〕とならんで、「身体動作の中動 (body action middle)」と総称される中動態のタイプに分類されている。「自分自身の身体に向けて、あるいは自分自身の身体を通して、遂行される動作 (actions carried out on or through one's own body)」<sup>6)</sup>のタイプである。

このような表現は一般に、再帰 (reflexive) とみなされることも多いが、ケマーは、中動と再帰を区別する。このような動作を表わす動詞の表現が、いくつかの言語において、形の上で、再帰と区別できない場合があるものの、再帰とはっきり区別される独自の指標をもつ場合も多く、意味の上では、再帰と区別される中動であるというのである<sup>7)</sup>。

ケマーは、再帰 (〔自分を見る〕〔自分をたたく〕) というような例があげられているを、いわば、自分自身を目的語とする他動詞の能動表現と考える。再帰においては、他動詞の主語 (ケマーの用語では Initiator) と目的語 (ケマーの用語では Endpoint) が同一実体をさし、主語である Initiator は、他の実体にはたらきかけるのと同じように、Endpoint である自分自身にはたらきかける。そこでは、同一実体内でいわばはたらきかける側 (Initiator) とはたらきかけられる側 (Endpoint) の役割分担、分離・区別が生じている。

これに対し中動においては、他動詞の主語と目的語のかたちで、Initiator と Endpoint を考えることができない。〔体を洗う〕〔服を着る〕といった動作は、「(ひとの) 体を洗ってやる」とか「(ひとに) 服を着せてやる」といった他へ向かう動作とは別種の動きをする。これらの動作においては、はたらきかけを受ける身体部分も受け身一方ではなく、自ら動いてその動作に大きく参与している<sup>8)</sup>。同一実体の内部で Initiator と Endpoint は区別し

きれない。中動において、Initiator と Endpoint という意味論的役割は、ともに「ただひとつの全体としての実体 (a single holistic entity)」に帰されると、ケマーはいう<sup>9)</sup>。

ケマーは再帰と中動の違いを、動詞の表わす出来事に参与するもの (participant) の「相対的区別可能性 (relative distinguishability)」の程度の差と考える。再帰も中動も、出来事に参与する2つの participant, Initiator と Endpoint が同一実体であること、すなわち自らの引き起こした出来事の影響を自ら被ることに、変わりはない。しかし、Initiator と Endpoint の区別できる度合いが、再帰は中動より大きいというのである。

ケマーは、再帰と中動を、participant が2つである出来事 (それは他動詞の能動で表わされる) と1つである出来事 (それは自動詞の能動で表わされる) とのあいだに位置づける<sup>10)</sup>。再帰の方が他動詞に近く、中動が自動詞に近い。このようなケマーの整理からすれば、中動における「ただひとつの全体的実体」は、自動詞の主語 (能動であれば他動詞の主語も同様であるが) のような全き1ではなく、内部になんらかの「ずれ」や「二重性」を含むことになるのではないだろうか。あるいは、主語であらわされる何かが、出来事を通じて元の状態からずれながら変容していくといえるかもしれない。

ケマーの論は、中動態で表わされる「身だしなみ、ボディ・ケア」が、身体を介した自己自身へのはたらきかけ、自己自身との関係として、ただし他動詞の主語 (subject=主体) と目的語 (object=客体, 対象) との関係とは異なる関係として、意識されてきたことを示している。それはすなわち、中動態の動詞で表わされる出来事が、自足安定する不変の1者においてなりたつのではなく、別個の2者の一方から他方に向けてなりたつものもない、いわば (何かと何かのあいだとはいえない) あいだの微妙なずれとして生じていることを、示唆するものであろう。

## 2. 離人症と中動態

精神科医の香山リカは、冒頭にあげたような、自分の身体を自分にとって他なるものように語る言葉づかいに、同じく最近、若者のあいだにみられるダイエット——それは自分の身体をコントロールすることである——や茶髪、ボディ・ピアスなどの流行を重ね合わせ、そこに“超心身二元論”をみてとる<sup>11)</sup>。心と体を別の実体とみなす伝統的な心身二元論を超えた、「心は体と別、しかも心はからだの外にある」という二元論である。心は体を離れ、モノを操作するように外からこれを操作する。そこには、体が傷つけば心も傷つくとか、人の内面が身体的外見に表われるとかいう発想はない。心身のあいだに、それどころか体の各部分のあいだにすら、まとまりや統一性は考えられていない、というのが香山リカの見解である<sup>12)</sup>。

香山リカは、最近の若者にみられるこのような“超心身二元論”と、離人症という精神病理現象との類似を指摘している。離人症 (depersonalization) の症状のひとつ、自己の身体に対する疎隔 (estrangement)、すなわち自分の身体が自分のものではないかのように感

じられることが、若者の自己の身体に対する操縦の意識と奇妙に一致するというのである<sup>13)</sup>。

われわれの文脈からすれば、離人症にみられる病的な「自己の身体に対する疎隔感」は、自己の身体に対する関わりが他動詞的なものに変容している、ということになるだろう。裏返せば、離人症の症状は、自己の身体に対する関わりが、本来、他動詞的なものではないことを示す。われわれはここに、自己の身体との関わりが、中動態で表わされてきたことの意味を、別の角度から見ることができるだろう。

たとえば、離人症の患者は、自分の身体について次のように語っている。

「私のからだもまるで自分のものでないみたい。だれか別の人のからだをつけて歩いているみたい」<sup>14)</sup>

「昨晚はまだ、手を腕の方へ押しつけてやらないと手が固定しないような感じでした。この前先生に、自分があると感じるためには自分を自分の中に、自分のからだの中に押し込んでやらなくてはならないんだとお話した通りだったのです。手も同じことで、腕はこれまで切り株みたいだったのが今では手が元通り腕から生えています。」(回復途上の患者のことば)<sup>15)</sup>

「歩いても、歩いているのではなくローラースケートに乗っているような、車輪にのっかって動いているような感じだったのは、足の中に自分がいなかったからなのでしょうか？」<sup>16)</sup>

「別のひとのからだ」「切り株」「ローラースケート」「車」——患者は自分の身体をこれらのものにととえる。ここで訴えられるのは、自己の身体が、自分の体としてではなく、ただのモノとしてしか感じられないということである。本来、自己の身体は自分にとって、他のものとは違ったものとして感じられる——あまりにも当たり前で、普段はほとんど意識されることのない私と私の体との関係を、離人症患者のことばは逆照射する。

離人症では、このような、自己の身体に対する疎隔感の他に、自分自身や外の世界の事物に対する疎隔感も、症状としてあらわれるという<sup>17)</sup>。

「自分というものがまるで感じられない。いまここでこうやって話しているのは嘘の自分です。なにをしても自分がしているという感じがない。」<sup>18)</sup>

「私は私自身ではありません。私の存在から切り離されてしまっています。」<sup>19)</sup>

「高い木を見てもちっとも高いと思わない。鉄のものを見ても重そうな感じがしないし、紙切れを見ても軽そうだと思わない。とにかくなにを見てもそれがちゃんとそこにあるのだということがわからない。色や形が目にはいってくるだけで、「ある」という感じがちっともしない。」<sup>20)</sup>

「私は世界とのつながりを持っていません。世界はどこかへ行ってしまいました、消えてしまったのです。」<sup>20)</sup>

これらの症状は、自我感の喪失、事物の実在感の喪失といわれることもある。自分自身との関係、外界の事物（モノ）との関係が変容してしまい、自分が自分である、モノがモノであると、感じられないわけである。離人症の患者にとっては、自分が自分であること、モノがモノであることが、成り立たなくなっているとさえ、いうことができるかもしれない。

このように考えると、離人症は、私が私であり（私の体が私の体であることも、そこに入るだろう）、モノがモノであり、世界が世界であることの、何か根元のようなところ、当たり前すぎてどんなことなのかあらたまって説明することが難しいことさらに、関わる疾患と思われてくる。事実離人症は、哲学的・心理学的・自我心理学的・現象学的に興味深い問題を提供してくれるものとして、多くの研究者の興味をひいてきたという<sup>21)</sup>。

フロイトの弟子のひとりであるポール・フェーデルン（Paul Federn）は、離人症を、「自我備給（ego-cathexis）」の貧困化というかたちで考察している。

フェーデルンは、「自我（ego）」を「自我感（ego-feeling）」と理解する。すなわち、自我はあくまで「体験（Erlebnis）」であり、自身の自我の感覚としてある、という理解である。フェーデルンは、フロイトと似たようなかたちで、自我のエネルギーを想定し、それを「自我備給」とよぶ。フェーデルンによれば、「自我感」は、この「自我備給」が主観的に体験されたものである<sup>22)</sup>。

フェーデルンはまた、自我に属するものと、自我に属さない外的対象とを分かち、「自我境界（ego boundary）」を考える。心的自我（mental ego）、および心的自我の一部をなす身体的自我（bodily ego）が、心的自我感、身体的自我感として、自我境界の内部で、直接体験されるのに対し、外的事物は、その印象が外部から自我境界を通過してくることによって、実在性をもつ対象、モノとして認識される、というのである<sup>24)</sup>。自我境界も、特に身体的自我感によって備給され、それと成立している<sup>25)</sup>。

フェーデルンはこのように、自我備給という根源的なはたらきによって、私が私であり、私の身体が私のものであり、モノがモノであるようになっている、と考えている。ここから、離人症は以下のように説明される。すなわち、自我感として体験される自我備給が衰退すると、自分が自分であり、自分の身体が自分の体である、ということが感じられなくなる。これは、「自我が内的堅固さを失った」状態、「自我の崩壊」であって、「自我アトニー」と呼ぶべきものである<sup>26)</sup>。他方、特に自我境界の自我感の備給が衰退すると、そこを通過してくる外的事物が、実在感を失うことになる<sup>27)</sup>。

注目すべきことに、フェーデルンは自我感を、「対象なき自我リビドー」によるものと考え、その性格を表現するのに、「古代ギリシア語」の「中動態」をもちだしている<sup>28)</sup>。

自我感（心的自我感，身体的自我感）は、一種のナルシズムであるが、このナルシズムは、自我を対象としたナルシズムではない、とフェーデルンは強調する。対象備給と自我備給は別のものである。確かに「自分自身を愛する」というような、自我を対象とした、いわば再帰的なナルシズムも存在するが、それはあとになってから成立するもので、ナルシズムの根源的なかたち、フロイトのいう「一次的ナルシズム（primary narcissism）」は、「対象なきナルシズム（objectless narcissism）」だということである<sup>29</sup>。先にとりあげたケマーの中動態論と照らし合わせても、フェーデルンが自我を対象としないナルシズム（すなわちわれわれの文脈でいえば自我自身との非他動詞的な関わり）を「中動態」で説明することは、十分理解できる。

フェーデルンは自分の説を、以下のように定式化している。

a) 自我感は、対象なき自我リビドーによって維持される。この対象なき自我リビドーは、欲動の前-快感に対応する。b) ナルシズムは「中動態」として始まり、「再帰的」リビドーになる。その後の展開においても、「中動態」ナルシズムと「再帰的」ナルシズムは区別されるべきである<sup>30</sup>。

われわれにとって興味深いのは、私が私であり、私の体が私のものであり、私の知覚する世界がリアルな世界であることを支える自我備給、一次的ナルシズムの初源的なかたちが、「中動的」だという指摘である<sup>30</sup>。離人症のさまざまな症状から振り返って考えると、「中動」という言語の範疇は、私が私であり、私の体が私のものであり、私の知覚する世界がリアルな世界であることを成り立たせているはたらきを認識するための、思考の範疇として利用できる、ということになるのではないだろうか。

こうしてみると中動態は、単に自己の身体へのはたらきかけ、自己の身体との関わりを表現するだけでなく、私自身（身体をも含む私自身）や世界の成立にはたらく或る根源的なはたらき一般を、表現するものでもあるように思われる。

### 3. 二元論と一元論のあいだ

ケマーのいう「身体動作の中動」には、1で述べた通り、「姿勢の変化」、「移動のない運動」、「移動のある運動」の動作が含まれている。[すわる] [横になる] [立ち上がる] などの姿勢を変える動作、[振り向く] [身をかがめる] [うなずく] などの場所の移動のない運動の動作、[登る] [歩く] [走る] などの場所を移動する運動の動作が、いくつもの言語で、中動態で表現されるというのである。

これらの動作は、「身だしなみ、ボディ・ケア」の動作に比べ、再帰から遠いとケマーは考える。「場所の移動のない運動」「姿勢の変化」「場所を移動する運動」の動作は、自己の一部としての身体を操作することによって行われる動作（場所の移動のない運動、姿

勢の変化)、自己の位置づけが定義の一部をなす動作(姿勢の変化、場所を移動する運動)というように、この順で次第に participant の相対的区別可能性が小さくなる。とくに「場所を移動する運動」については、身体の部分の布置がほとんど意味をもたず、もっぱら「自己(self)」の或る位置から別の位置への移動が重要となっている、とケマーは指摘する<sup>32)</sup>。そして、人間が自己の身体を通して遂行する動作が、「はたらきかけたりはたらきかけられたりする構成要素に区別される複合的運動というよりむしろ、単一のあるいは原子的な運動と捉えられる」場合、それは Endpoint なしの、participant が1つの自動詞で表わされることになる<sup>33)</sup>。実際、「場所の移動のない運動」「姿勢の変化」「場所を移動する運動」などを、自動詞の能動態で表わす言語もある。

ケマーの図式では、「場所を移動する運動」を表わす中動のように、自動詞に近くなればなるほど、participant の区別可能性が小さくなればなるほど、それが能動態ではなくあえて中動態で表わされる理由が説明しにくくなるのは確かである。

ケマーの中動態論は、他動詞、再帰、自動詞の各々と、中動との違いは説明するが、能動態一般と中動態との違いを積極的に説明しようとはしない。あえてその違いを読み込めば、以下のようなことになるだろう。他動詞の能動は Initiator と別の実体を Endpoint とし、自動詞の能動は Initiator だけで Endpoint をもたない。他動詞にしる自動詞にしる、能動態においては、どちらも主語である Initiator は Endpoint ではない、すなわち自ら影響を被らない、ということになる。ケマーの論において、他動詞・自動詞にまたがる能動態一般と中動態との区別を示唆するのは、Initiator が自ら影響を被るかどうかどうかという、この点だけである。

中動態を考えるのに、Initiator-Endpoint という主語-目的語の図式、すなわち主体-客体の図式を使いつづけることが、能動一般と中動の違いをはっきりさせる際の足枷となっているように思われる。「participant の相対的区別可能性の低さ」というケマーの中動態の定義そのものが、自己同一的な項を基本として項と項との関係から中動態を考えることの困難さ、限界を示している。

その点を考えれば、別のところ<sup>34)</sup>で触れたように、バンヴェニストによる中動態の説明、すなわち能動態が「主語から発して主語の外で実行される過程を示す」のに対し、中動態においては「動詞は、主語が過程の座であるような過程を示し、主語は過程に対し内的である」<sup>35)</sup>という説明の方が、思考の範疇としての中動態を、よりの確に把握するものであろう。われわれは、中動態における主語と動詞の関係、動詞の表わす出来事や過程と主語として名詞で示されるものとの関係を、agent (動作主) である項を基本とした主体-客体図式とは違った枠組みで、捉えなければならないのだ。

にもかかわらずケマーの中動態論、とくに「身体動作の中動」をめぐる議論は、われわれが中動態を考える際に押さえなければならない重要なポイントを、示してくれるように思われる。中動態の動詞で表わされる出来事を、バンヴェニストに基づいて、名詞で表わ

される主語から発するものではないと理解し、さらに進んで中動態を、自己同一的な項に基づかずとも、agent（動作主、作因）がなくとも、いわばひとりでに出来事が生じ、その出来事の内に主語である項も巻き込まれている、場合によっては巻き込まれながら生じる、というかたちで考えるとき、ひとはそこに、「ひとりでに生じる出来事」というような、何か根源的な1なるものを思い浮かべる可能性がある。しかし、中動態は、ケマーが指摘するように、participant について言えば「1でもなく2でもない、1から2へ至る途中」というような状態、何かと何かのあいだのずれとは言えないような微妙なずれを、特徴として示しもするのだ。われわれはここで、ジャック・デリダ (Jacques Derrida) が、a のつく *différance* の概念、すなわち項なき時間的空間的差異化のはたらきを説明するのに、中動態をひきあいに出したことを思い出してもよい<sup>39)</sup>。フェーデルンのいう自我備給、「対象なきナルシズム」も、自足する1でも互いに向き合う2でもない自我自身との関係、この種の微妙なずれ（そこから自我が成立する）の生じつづけることであろう。中動態を理解するには、この種の、何かと何かとのあいだのずれともいえない微妙なずれ、何かと何かとの関係ともいえない微妙な関係を、無視してはならないだろう。そこに、根源的な1なるものは、存在しない。

出発点に戻って、自己の身体との関わりを考えても、心身関係は、二元論か一元論かの二者択一では論じきれないだろう。心身は「バラバラ」ではないが、心身一如と言いつけるものでもない。

ケマーは、身体動作の自動詞による表現と中動による表現との違いを説明する際、中動における「はたらきかけたりはたらきかけられたりする構成要素に区別される複合的運動」<sup>37)</sup>、「身体部分の布置」<sup>38)</sup>、「(participant の) 何らかの程度の内的複雑性」<sup>39)</sup>を強調する。

[すわる] [立ち上がる] [振り向く] [登る] [歩く] というような身体動作の中動において、主語が表わすもの（ケマーのことばによれば、Initiator と Endpoint がともに帰される「ただ1つの全体としての実体 (a single holistic entity)」) は、身体を含めた自己ということになるだろう。しかしその「身体を含めた自己」は、「複合的」「布置」「複雑性」などといわれる何か、われわれのことばでいえば何かと何かとのあいだのずれともいえない微妙なずれ、何かと何かとの関係ともいえない微妙な関係を内に含んでいる、あるいはむしろそこから成り立っているのだ。

近年の認知心理学や身体運動学は、この「身体を含めた自己」において起こっていること、いわゆる「心身関係」の微妙さを、今までとは違ったかたちで明らかにしつつあるように思われる。認知や身体の運動を研究する科学は、伝統的に、見たり聞いたりすることを、センサーとしての感覚器官が集めるセンス・データと知覚や認識によるその意味づけというかたちで考察し、からだ動くこと（からだを動かすこと）を、意志による運動指令とそれに従う身体というかたちで追究してきた<sup>40)</sup>。しかし、これらの分野の研究は現在、この種の単純な主客や心身の二元論がもはや維持できないということを示す実験結果



を、次々挙げてきている<sup>41)</sup>。

例えば、認知心理学を専門とする佐々木正人は、「空書」(手のひらや膝頭などのからだの表面に文字を書きつけるようにしたり、からだの前の宙で指をふるわせて文字をつづるようにしたりする動作)というからだの動きが漢字の想起に及ぼす効果を調べる実験を行った。実験では、漢字の要素を成す漢字、例えば「口」「共」「十」を次々と提示され、それらが組み合わせることができる一つの漢字(この場合は「異」)の想起を求めると言う課題が100名を超す大学生に対し与えられた。このような課題を解く時、ほとんどすべての日本人学生は、ことさら意識することなく空書を行った。そして課題を解く際に、空書を許すグループと空書を禁止するグループとに分けて行った実験では、空書を禁止されたグループの正答率は空書を許されたグループの半分程度にとどまったという。空書には、内的な思考過程をスムーズに進める大きな働き、意識過程を具体的な行動でコントロールする働きがある、と佐々木は結論する<sup>42)</sup>。

認知心理学の分野ではこのように、認識において身体の動きが果たす役割に注目する研究が、さまざまな実験を通じてすすめられている<sup>43)</sup>。こころや精神がからだを動かすというばかりではなく、からだの動きが認識を生じさせるといういわば逆方向の関係も、心身間には見出されるわけだ。心身はもちろん「バラバラ」ではないが、だからといって心身は「ひとつ」と言ってしまうても問題の解決にはならないだろう。

心身の「関係」は、一元論と二元論のあいだに、さらには別のかたちで、考察されなければならない。中動態は、そのための思考の範疇となる可能性をもっている。

#### 註

- 1) 引用は順に、小学館発行 雑誌「だいじょうぶ」2000年9月号 p.7, 同p.57, 芝パーク出版発行 雑誌「Saita」2000年9月14日号 p.45, 同 p.157より。
- 2) Suzanne Kemmer, *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Co., 1993, p.16
- 3) J・デュボワ他 【ラールス言語学用語事典】大修館書店 1980, p.280
- 4) 言語の範疇と思考の範疇の関係については、Émile Benveniste, «Catégories de pensée et catégories de langue» 1958, (*Problèmes de Linguistique Générale*, Paris, Gallimard, 1966 所収)を参照。
- 5) 森田亜紀「[述語的なもの]と芸術—メルロ＝ポンティの後期思想から—」芸術学芸術史論集第6号 神戸大学文学部芸術学芸術史研究会 1994, 同「芸術における地平性—次元性と中動態」倉敷芸術科学大学紀要創刊号 1996, 同「中動態の射程」同第4号 1999
- 6) Suzanne Kemmer, *The Middle Voice*, p.53
- 7) 同 p.53
- 8) 同 p.60
- 9) 同 p.66
- 10) 同 p.3
- 11) 香山リカ「少年・少女たちの「からだ」のゆくえ」(河合隼雄+大庭みな子 共同編集『現代日本文化論 2 家族と性』1997所収), p.197
- 12) 同 p.202
- 13) 同 p.204

- 14) 木村敏「離人症の精神病理」(『自己・あいだ・時間』弘文堂 1981 所収), p.61
- 15) V. E. v. ゲーブザッテル「離人症問題に寄せて」1937 (木村敏・高橋潔訳) (『岩波講座精神の科学 別巻 諸外国の研究状況と展望』1984所収, p. 52
- 16) 同 p.52
- 17) 木村敏「離人症の精神病理」 p.65, V. E. v. ゲーブザッテル「離人症問題に寄せて」 p.43~44
- 18) 木村敏「離人症の精神病理」 p.61
- 19) V. E. v. ゲーブザッテル「離人症問題に寄せて」 p.45
- 20) 木村敏「離人症の精神病理」 p.61~62
- 21) V. E. v. ゲーブザッテル「離人症問題に寄せて」 p.45
- 22) 木村敏「離人症の精神病理」 p.60
- 23) Paul Federn, *Ego psychology and the psychoses*, Imago Publishing Co. Ltd., London, 1953, p. 5
- 24) 同 p.35~36
- 25) 同 p.46
- 26) 同 p.243
- 27) 同 p.35~36, p.46, p.246ほか
- 28) 同 p.312
- 29) 同 p.289~292
- 30) 同 p.319
- 31) 自我感が中動態だとするフェーデルンの指摘は、デカルトのコギトが原文では *videre videor*, すなわち「…と私には思われる, 見える」を意味するラテン語の中動態で表わされているとの, 精神病理学者, 長井真理の指摘とも呼応するところがある; 長井真理「分裂病者の自己意識における「分裂病性」」1990 (『内省の構造』岩波書店 1991所収) p.190
- 32) Suzanne Kemmer, *The Middle Voice*, p. 70
- 33) 同 p.58
- 34) 拙稿「中動態の射程」
- 35) Émile Benveniste, «Actif et moyen dans le verbe» 1950 (*Problèmes de Linguistique Générale*, Paris, Gallimard, 1966 所収), p.172
- 36) Jacques Derrida, «La différence» 1968, (*Marge-De la Philosophie*, Nijoff, 1969 所収), p. 9
- 37) Suzanne Kemmer, *The Middle Voice*, p. 54
- 38) 同 p.70
- 39) 同 p.72
- 40) 長崎浩「からだの自由と不自由 身体運動学の展望」中公新書 1997 p.87
- 41) 長崎浩「からだの自由と不自由 身体運動学の展望」, 佐々木正人『からだ：認識の原点』東京大学出版会 1987 ほか
- 42) 佐々木正人『からだ：認識の原点』p.90-91
- 43) 佐伯胖・佐々木正人編『アクティブ・マインド』東京大学出版会 1990

## One's Own Body and the Middle Voice

Aki MORITA

*College of the Arts*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 2000)

“Grooming or body care action middle”, for example in French *se laver* or *s'abiller*, is one of the well-known situation types of the middle voice. In many languages the relations to one's own body are expressed in the middle voice, which is distinct from the active or the passive or the reflexive. That is to say the relations to one's body have not been taken in subject-object schema. An American linguist Suzanne Kemmer says that the middle is between the transitive (2 participants) and the intransitive (1 participant).

We consider that the middle voice can be adopted as a category of thinking. The middle may be useful to think between monism and dualism.